

男性看護師に対する女性患者の認知度とニーズに関する研究

大山 祐介¹・戸北 正和¹・小川 信子¹・宮原 春美²

要 旨

目的：

男性看護師に対する女性患者の認知度，ニーズを把握し，男性看護師のケアのあり方を明らかにするために質問紙調査を行った。

方法：

N大学医学部附属病院の一般病棟に入院する女性患者188人を対象として，質問紙調査を行った。

調査内容は患者の背景，男性看護師の認知度，必要性，男性看護師から看護を受けた経験の有無などである。

調査期間は平成14年11月11日～平成15年1月31日である。

結果：

1. 男性看護師の認知度は高かったが，実際に男性看護師から看護を受けた経験がある人は34人（18.9%）と2割に満たなかった。男性看護師を必要と回答した人は97人（53.9%）と過半数を超えていた。
2. 男性看護師に看護を受けた経験がある患者，男性看護師が勤務する病棟の患者は「男性看護師が必要」と認識している人が有意に多かった。
3. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応では，羞恥心が伴うケア，処置においては「女性看護師と代わる」が多く，特に十分な配慮が必要である。

保健学研究 19(1): 13-19, 2006

Key Words : 男性看護師, ジェンダー, 女性患者, 羞恥心

I. はじめに

日本の看護職に占める男性の看護師・准看護師の割合はオーストラリア（8.3%），イギリス（8.9%）¹⁾と比較すると平成12年4.0%（43,966人）²⁾，平成14年4.2%（48,886人）³⁾と少ないが，年々増加傾向にある。

平成元年の教育課程改正後，男子看護学生の母性看護学実習が開始され，平成5年には保健士が誕生した。

また平成14年保健婦助産婦看護婦法の改正により，男女看護職の名称が看護師に統一された。男性助産師導入の検討も行われ，男性看護師の活躍できる環境は整い始め，一般病棟における勤務者も徐々に増加傾向にある。

しかし，看護は身体接触を伴うケアが多く，特に女性患者は男性看護師からのケアを拒否することが多いと報告されている^{4,6)}。

そこで，男性看護師に対する女性患者の認知度，ニーズを把握し，男性看護師のケアのあり方を明らかにするために質問紙調査を行った。

II. 調査方法

1. 調査対象及び方法

N大学医学部附属病院（以下，N病院とする）で精神科病棟，小児科病棟，ICUなどを除く一般病棟に入院す

る女性患者188人を対象として，自記式質問紙調査（留め置き法）を行った。患者選択にあたっては意識レベルがよく，自力で記入ができる人全員とした。N病院に勤務する男性看護師は21人（4.4%）で，そのうち一般病棟に勤務しているのは脳神経外科病棟3人，整形外科病棟2人，外科病棟2人の計7人（1.5%）である。

2. 調査期間

平成14年11月11日～平成15年1月31日である。

3. 調査内容

調査内容は1)患者の背景，2)男性看護師の認知度，必要性，3)男性看護師から看護を受けた経験の有無，4)男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応，5)男性看護師に対する意見（自由記載）である。

1)は女性患者の年齢，入院病棟であり，2)については，職業としての男性看護師とN病院内の男性看護師の存在を知っているか，また男性看護師を必要と思うかどうかなどを質問した。

4)については，看護師が日常的に関わる観察項目として日常会話，バイタルサイン測定，診察（呼吸音や腸音の聴診，身体各部の触診）の3項目をとりあげた。日

1 長崎大学医学部・歯学部附属病院

2 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

常生活援助項目としては食事、移動、排泄、入浴、更衣、清拭、洗髪の7項目、処置の項目としては日常最も多く行う採血とジェンダーが影響すると思われる導尿、外陰部の剃毛、急変時の対応の4項目をとりあげ合計14項目とした。そして男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応を、「女性看護師に代わる」、「男性看護師でもやむを得ない」、「男性看護師の方がよい」、「どちらでもよい」の4段階で問うた。

4. 倫理的配慮

質問紙調査にあたっては予め、本研究の目的、方法、意義、守秘義務等を文書で説明し、理解と承諾が得られた患者のみ調査対象とした。また、調査結果は統計的に分析した。

5. 用語の定義

ジェンダーとは心理的・社会的な男性性と女性性をいい、具体的には男性は力強い、頼もしいなどで、女性は優しい、温かいなどのそれぞれの性に対する役割期待をいう。

6. 分析方法

分析は分析ソフトSPSS Ver 9 を使用して χ^2 検定を行った。

Ⅲ. 調査結果

質問紙は180人から回収できた（回収率95.7%）。

1. 対象者の背景

対象者の年齢構成は図1のようになっており、50歳代が最も多く51人（28.3%）、次いで60歳代が32人（17.8%）であった。

患者の入院病棟別では2階病棟（産科、婦人科など）47人、6階病棟（整形外科、形成外科など）28人、9階病棟（消化器内科、膠原病など）19人であった。

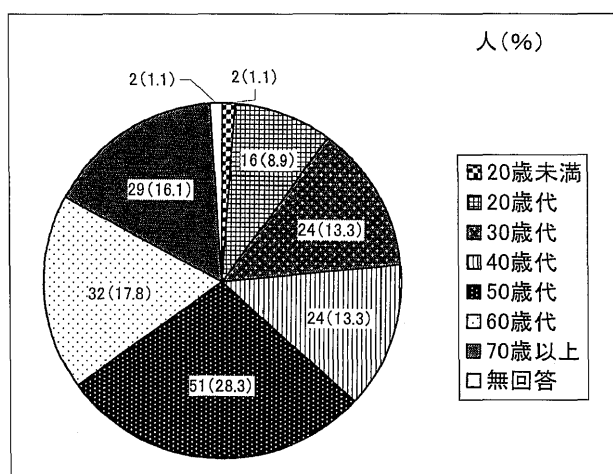


図1. 女性患者の年齢構成

2. 男性看護師の認知度、男性看護師から看護を受けた経験の有無

これまで職業として看護師に男性がいることを知っていた人は174人（96.7%）、さらにN病院内にもいることを知っている人は118人（65.6%）であり、病棟別では6階病棟、10階病棟が多かった。

また、実際に男性看護師から看護を受けた経験があるのは34人（18.9%）であり、その多くは男性看護師がいる病棟に入院している患者であった。

3. 男性看護師の必要性に対する認識

男性看護師が必要と回答した患者は97人（53.9%）、必要でないと回答した人は66人（36.7%）であった。

次に男性看護師から看護を受けた経験の有無と男性看護師の必要性に対する認識との関連をみた。表1のように男性看護師からの看護を受けた経験がある患者34人中、「男性看護師が必要」と認識している人は26人（76.5%）、「男性看護師が必要でない」と認識している人は7人（20.6%）であった。看護を受けた経験がない患者141人中「男性看護師が必要」と認識している人は70人（49.7%）、「男性看護師が必要でない」と認識している人は59人（41.8%）であり、男性看護師から看護を受けた経験の有無と男性看護師の必要性に対する認識には有意差があった（ $P < 0.0001$ ）。

また、男性看護師が勤務している病棟としていない病棟での男性看護師の必要性に対する認識をみた（表2）。勤務している病棟の患者30人中、「男性看護師が必要」と認識する人は23人（76.7%）、「男性看護師が必要でない」と認識している人は6人（20.0%）であった。勤務していない病棟の患者150人中、「男性看護師が必要」とする人は74人（49.3%）、「男性看護師が必要でない」と認識している人は60人（40.0%）であった。男性看護師が勤務している病棟では有意に「男性看護師が必要」と認識している人が多かった（ $P = 0.0222$ ）。

男性看護師の必要性の有無と患者の年齢による有意差は認められなかった。

4. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応

1) 観察項目と女性患者の反応（表3）

日常会話については「女性看護師に代わる」が17人（9.4%）、「男性看護師でもやむを得ない」は12人（6.7%）、「男性看護師の方がよい」は0、「どちらでもよい」は111人（61.7%）であった。

バイタルサイン測定ではそれぞれ12人（6.7%）、13人（7.2%）、0、116人（64.4%）、また診察では41人（22.8%）、25人（13.9%）、0、69人（38.3%）であった。

観察項目全体では「どちらでもよい」の回答が最も多く、38.3%~64.4%であり、各項目間における有意差はなかった。

表1. 男性看護師からの看護経験の有無と男性看護師の必要性に対する認識

	男性看護師が必要	必要でない	無回答
男性看護師からの看護経験有り	26(76.5)	7(20.6)	1(2.9)
男性看護師からの看護経験無し	70(49.7)	59(41.8)	12(8.5)
無回答	1(20.0)	0	4(80.0)

(%)
P<0.0001

表2. 男性看護師が勤務する病棟と勤務しない病棟での男性看護師の必要性

	男性看護師が必要	必要でない	無回答
男性看護師が勤務する病棟	23(76.7)	6(20.0)	1(3.3)
男性看護師が勤務していない病棟	74(49.3)	60(40.0)	16(10.7)

(%)
P=0.0222

表3. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応 - 観察項目について -

	女性看護師に代わる	男性看護師でもやむを得ない	男性看護師の方がよい	どちらでもよい	無回答
日常会話	17(9.4)	12(6.7)	0	111(61.7)	40(22.2)
バイタルサイン測定	12(6.7)	13(7.2)	0	116(64.4)	44(24.4)
診察	41(22.8)	25(13.9)	0	69(38.3)	45(25.0)

(%)

2) 日常生活援助項目と女性患者の反応 (表4)

日常生活援助項目では排泄, 入浴, 更衣, 清拭, 食事, 移動, 洗髪について患者の反応をみた(表4). 排泄では「女性看護師に代わる」が121人(67.2%), 「男性看護師でもやむを得ない」は8人(4.4%), 「男性看護師の方がよい」は0, 「どちらでもよい」は9人(5.0%)であった.

入浴, 更衣, 清拭では「女性患者に代わる」がそれぞれ

122人(67.8%), 116人(64.4%), 114人(63.3%)と最も多かった.

また, 食事, 移動, 洗髪では「どちらでもよい」がそれぞれ91人(50.6%), 97人(53.9%), 73人(40.6%)と最も多かった.

排泄, 入浴, 更衣, 清拭は羞恥心にかかわるケアであり, 「女性看護師に代わる」が多かった. また各項目間における有意差はなかった.

表4. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応 - 日常生活援助項目について -

	女性看護師に代わる	男性看護師でもやむを得ない	男性看護師の方がよい	どちらでもよい	無回答
排 泄	121(67.2)	8(4.4)	0	9(5.0)	42(23.3)
入 浴	122(67.8)	8(4.4)	0	10(5.5)	40(22.2)
更 衣	116(64.4)	10(5.6)	0	13(7.2)	41(22.8)
清 拭	114(63.3)	11(6.1)	0	13(7.2)	42(23.3)
食 事	32(17.8)	16(8.9)	2(1.1)	91(50.6)	39(21.7)
移 動	14(7.8)	14(7.8)	20(11.1)	97(53.9)	35(19.4)
洗 髪	47(26.1)	18(10.0)	0	73(40.6)	42(23.3)

(%)

3) 処置の項目と女性患者の反応 (表5)

処置の項目では外陰部の剃毛, 導尿, 採血, 急変時の対応について患者の反応をみた。外陰部の剃毛, 導尿ではそれぞれ「女性看護師に代わる」が124人 (68.8%), 122人 (67.8%) であった。

採血, 急変時の対応ではそれぞれ「どちらでもよい」が111人 (61.7%), 113人 (62.8%) であった。

日常生活援助項目と同様に羞恥心にかかわる外陰部の剃毛, 導尿では「女性看護師に代わる」が多かった。各項目間における有意差はなかった。

また同様に男性看護師が勤務している病棟としていない病棟で女性患者の反応との関連をそれぞれの項目別にみたが有意差はなかった。

各階でアンケートを回収しており, また混合病棟が多く, 病棟別の分析は困難であった。

5. 男性看護師に対する意見 (自由記載) について

男性看護師に対する自由な意見を記載してもらった結果, 59人 (32.8%) から68の回答が得られ, それを意味別にKJ法で分類した。

その結果, 「力強い, 移動時に頼りになる」が20, 「羞恥心のため抵抗がある」が14, 「どちらでもよい, 女性看護師とかわりない」が7, 「看護は女性のものというイメージがある」が4, 「特性を生かしてほしい」が4, 「男性患者には必要」が3, 「頼もしい」が2であった。またその他に「優しい, 丁寧, 元気など」肯定的なもの

が各1あり, 「大雑把, 違和感がある, 必要性を感じない」などやや否定的なものも各1あった (表6)。

IV. 考 察

1. 男性看護師の認知度, 男性看護師から看護を受けた経験の有無

今回の調査において, 職業として看護師に男性がいることを知っている女性患者は174人 (96.7%) であり, ほとんどの女性患者が職業として男性看護師が存在することを認知していた。このことは男女看護職の名称統一がテレビ, 新聞等のメディアを通じて大きく報道されたことも影響しており, 徐々に社会に浸透していると考えられる。

実際に男性看護師から看護を受けた経験がある人は34人 (18.9%) と2割にも満たない結果であった。N病院における男性看護師の全看護職者に占める割合は21人 (4.4%) であり, 全国の割合とほぼ同等であるが^{2,3)}, 特に脳神経外科病棟, 整形外科病棟, 外科病棟などの一般病棟に勤務しているのは7人であり, 男性看護師全体の3分の1と非常に少なかった。このため多くの女性患者が男性看護師に接する機会は少なかったものと思われる。

2. 男性看護師の必要性に対する認識

男性看護師が必要と回答した患者は97人 (53.9%) と半数以上が必要性を認めていた。

さらに男性看護師に対する認識を男性看護師からの看

表5. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応 - 処置の項目について -

	女性看護師に代わる	男性看護師でもやむを得ない	男性看護師の方がよい	どちらでもよい	無回答
外陰部の剃毛	124(68.9)	5(2.8)	0	10 (5.6)	41(22.8)
導尿	122(67.8)	5(2.8)	0	11 (6.1)	42(23.3)
採血	18(10.0)	10(5.6)	0	111(61.7)	41(22.8)
急変時の対応	15 (8.3)	10(5.6)	1(0.6)	113(62.8)	41(22.8)

(%)

表6. 男性看護師に対する意見 (自由記載)

意 見	
力強い, 移動時に頼りになる	20
羞恥心のため抵抗がある	14
どちらでもよい, 女性看護師とかわりない	7
看護は女性のものというイメージがある	4
特性を生かしてほしい	4
男性患者には必要	3
頼もしい	2
優しい, 丁寧, 元気など	各1
大雑把, 違和感がある, 必要性を感じない	各1

護の経験の有無と男性看護師が勤務している病棟と勤務していない病棟の関連をみた。その結果、男性看護師からの看護を受けた経験がある人は経験がない人に比較して「男性看護師が必要」と認識している人は有意に多かった。

また男性看護師が勤務している病棟としていない病棟の比較では「男性看護師が必要」と認識している人が有意に多かった。つまり、男性看護師が増加し、男性から看護を受ける機会が多くなること、また看護の専門性、質を高めて看護の職場における男性看護師の評価を高めていく必要がある。

山崎⁷⁾は医療消費者の多くは画一化されたジェンダーの規範やイメージによってではなく、個人の専門的能力(知識・技能)や人間的態度によって医療者を評価するようになるのではないかと述べている。社会的には看護というと女性というイメージがある。今回の調査でも男性と接したことがある人は男性看護師に対して必要性を認めており、いかに専門職としての対応を行えるか、それを積み重ねて行くことでジェンダーにかかわらず看護師としてみられると考える。吉崎ら⁸⁾の研究でも同様の結果が得られている。また臨床においては患者の性格や入院期間なども影響すると考えられるが、かわりを続けるうちに信頼が強くなり、男性、女性ということ意識せずに看護を行える場面にも遭遇することがある。

男性看護師と接したことがない人は男性看護師に対するイメージがつきにくく、看護職者というよりも男性として捉えていたのではないかと考える。看護という職業には、女性性に由来するイメージがつきまとい、「看護は女性の職業」といった社会的固定観念がある⁹⁾といわれており、このことが影響したものと考える。

3. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応

男性看護師が行う看護について観察項目として日常会話、バイタルサイン測定、診察の3項目、日常生活援助項目として食事、移動、排泄、入浴、更衣、清拭、洗髪の7項目、処置の項目として採血、導尿、外陰部の剃毛、急変時の対応の4項目の合計14項目をとりあげ、検討した。

観察項目の中でも日常会話、バイタルサイン測定は「どちらでもよい」という回答が6割以上であり、これらはほとんど身体接触を伴うことがないことや日常的な場面であるためと考える。

診察では女性患者の反応に差がなかった。診察は明らかに身体接触を伴い、羞恥心が生じやすい状況にあるが、日常的に医師が行っているため、看護というよりも医療というイメージが強くなり、このような結果になったと考えられる。

日常生活援助項目の中で排泄、入浴、更衣、清拭では「女性看護師に代わる」が6割以上であり、羞恥心が伴

うためと考える。これらの看護行為は病院内では日常的に行われていることであるが、身体接触以前に異性に身体を見られることは普段ではありえないことである。男性看護師に対する羞恥心が先に立つのは当然のこととして捉える必要がある。しかし、男性看護師の方がはじめから女性患者を敬遠し女性看護師と交代するのではなく、専門職者として説明し、合意を得た上で実施することが必要である。さらにより良い看護ケアを提供するためには日常から信頼関係を築くことが重要である。

また食事、移動、洗髪では「女性看護師に代わる」が少なく、「どちらでもよい」が半数程度であった。特に移動では「男性看護師の方がよい」が他の項目に比べてやや多く、このことは男性に力強さを期待しているためと考える。

処置の項目の中で外陰部の剃毛、導尿は「女性看護師に代わる」が7割近くになっていた。これらは性器に関わることで、もっとも羞恥心が伴うものだからと考える。看護は身体接触を伴うケアが多いため、羞恥心が生じやすい。船橋¹⁰⁾は身体接触は性的な接触を連想させがちなので、異性愛が支配的な現代では、異性の看護者から身体接触を伴う処置を受けるとき、同性の看護者から受けるよりも一層強く、羞恥感情が呼び起こされやすいと述べており、実際に男性看護師から様々な看護ケアを受けるとなると戸惑いが生じるものと思われる。

採血、急変時の対応は「どちらでもよい」が6割以上となっていた。これは適切な処置ができること、また命にかかわる緊急性の高い場面での冷静な対応が求められるためと考える。

「男性看護師の方がよい」と回答した人は移動の項目以外ではほぼ0であったが、羞恥心を伴う項目以外では「女性看護師にかわる」よりも「どちらでもよい」が多く、この結果は男性看護師に対する否定的な反応とはいえないであろう。

4. 男性看護師に対する意見(自由記載)について

肯定的な意見として「力強い、移動時に頼りになる」が20と多かった。これは看護の実践能力というより男性一般のイメージで捉えられていた。

また、否定的な意見として「羞恥心のため抵抗がある」が14と多く、前述したように男性看護師が実際にケアをする場合、羞恥心の問題は大きく、十分な配慮が必要である。また「女性看護師と変わりない」という意見が7ある一方で「看護は女性のものというイメージがある」という意見も4あり、看護職者に対するジェンダーバイアスが存在するものと思われる。看護職を典型的な女性的職業のひとつとみなしている社会一般における認識が反映されているものと考えられる。

現在の状況では男性看護師と患者が接する機会は少ないが、今回の調査結果から接したことがある患者はより男性看護師の必要性を認めていた。男性が看護界に進出

し、徐々に増加しており、ここ10年間の増加率を見ると、看護職全体に比べて明らかに男性看護師の増加率は高くなっている¹¹⁾。

今後さらに男性看護師、女性看護師といった性差による選択からやがてケアの質による個人への選択を余儀なくされる時代が到来するであろう。そのためには男性看護師自身がジェンダーに縛られることなく個人の専門的能力（知識・技能）をのびし、人間的態度を向上させる必要がある。そして男性看護師の増加をはかるために職業選択を考えている若い世代に男性看護師についてアピールしていくことも重要である。

V. ま と め

1. 男性看護師の認知度は高かったが、実際に男性看護師から看護を受けた経験がある人は2割に満たなかった。また、男性看護師を必要と回答した人は過半数を超えていた。
2. 男性看護師に看護を受けた経験がある患者、男性看護師が勤務する病棟の患者は「男性看護師が必要」と認識していた人が有意に多かった。
3. 男性看護師から看護を受ける場合の女性患者の反応では日常生活援助項目の排泄、入浴、更衣、清拭、処置の項目の外陰部の剃毛、導尿は「女性看護師と代わる」が多く、特に羞恥心が伴うケア、処置においては十分な配慮が必要である。

謝 辞

本研究を行うにあたりまして、アンケートに御協力くださいましたN病院の看護部、看護師長、女性患者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 北林司：海外文献にみる男子看護学生と看護師の現況，看護教育，42，39-42，2001.
- 2) 日本看護協会出版：平成14年看護関係統計資料集，12-13.
- 3) 日本看護協会出版：平成16年看護関係統計資料集，12-13.
- 4) 春日キスヨ：ケアとジェンダー「ナースのお仕事」は女の仕事？ 看護学雑誌，66，989-993，2002.

- 5) 編集部：日本の看護師のいまとこれから アンケートにみる看護師の意識，看護展望，3，34-44，1992.
- 6) 百田武司，鈴木正子：男性看護者のかかえる問題，看護学雑誌，62，280-283，1998.
- 7) 山崎裕二：男性看護師の感情の歴史点描 看護師社会におけるジェンダーの行方，看護学雑誌，1012-1017，2002.
- 8) 吉崎弘之，高橋その：看護師に対する患者の意識調査 患者アンケートより，一般病棟における看護師の役割を考える，第17回日本看護学会集録（看護管理），112-114，1986.
- 9) 北林司：男性看護師が認識する男性であることの特異性 X県におけるインタビュー調査から，看護学雑誌，1022-1027，2002.
- 10) 船橋恵子：看護とジェンダー，看護教育，1，14-18，2001.
- 11) 矢原隆行：男性看護職をめぐる課題と戦略 その隘路と可能性について，看護学雑誌，11，1006-1011，2002.

参考文献

- 1) 矢原隆行：看護教育の現場におけるジェンダー構築 男子看護学生をめぐる状況，看護教育，1，34-38，2001.
- 2) 松本暢子：絶対にイヤ！看護師の産婦人科への配置 患者の立場から，看護学雑誌，12，1121-1122，1992.
- 3) 菅野美江子：看護師への役割期待，K大学病院における調査を通じて，第27回日本看護学会集録（看護管理），74-77，1996.
- 4) 橋爪俊喜，山下みよ子，中西りつ子，上田陽子，稲田優子，和久谷己恵：看護師の看護業務遂行に対する評価と期待度，第23回日本看護学会集録（看護総合），231-233，1992.
- 5) 矢原隆行，床島正志，北林司，仲本勉，山田正巳：[座談会] 男が看護する意味「名称統一後」の男性看護職の行方，看護学雑誌，11，998-1005，2002.
- 6) 井澤ひとみ：看護師は婦人科的処置に就けないか，看護の専門的態度と性差，助産婦雑誌，53，88-91，1999.

Research on the degree of recognition of woman patients toward man nurses and those needs

Yusuke OYAMA¹, Masakazu TOKITA¹, Nobuko OGAWA¹, Harumi MIYAHARA²

1 Nagasaki University Hospital of Medicine and Dentistry

2 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Abstract

Purpose:

Questionnaire investigation was done to find out a degree of recognition of woman patients toward man nurses and those needs.

Method :

Questionnaire investigation was done targeting 188 woman patients who entered the general ward of the N university hospital of medicine and dentistry.

Contents of investigation are in such cases as a patient's background, a degree of recognition of man nurses, the experience of receiving nursing from man nurses, the need.

Result :

1. A degree of recognition of man nurses was high.

Patients with the experience of receiving nursing from man nurses were 34 people, 18.9% less than 20%.

Patients who admitted the need of man nurses was 97 people, 53.9%.

2. Patients who had the experience that man nurses cared for it admitted the need of man nurses.

Patients who was in the ward which man nurses was working in evaluated man nurses high, too.

3. Woman patients who hope to change man nurses into woman nurses in the sense of shame.

we must consider care.

Health Science Research 19(1): 13-19, 2006

Key Words : man nurses, a sense of shame, gender, woman patients